

V. 経営の指標

(モデル)

ナシ根域制限・養液土耕・二本主枝垣根仕立て栽培(栽植密度 2.5m×5m 80本/10a)

経営面積 1ha (品種構成 幸水 60a あきづき 40a)

1. 初期導入コスト

参考データ 表 24(45p)

表 3 開発技術導入のための10a当たり開園費

(千円/10a)

項 目	開発技術栽培	慣行栽培	備 考
苗木	136	68	80本(40本)
果樹棚	650	640	支柱等
給液施設	93	—	液肥混入機等
給液施設工事	75	—	雇用延べ5人
灌水施設	—	147	スプリンクラー
灌水施設工事	—	521	委託工事
仕切板	23	—	80枚
根域制限シート	77	—	200m
高うね作成工事	150	—	雇用延べ10人
マルチ資材	40	—	タイベック200m
肥料	7	50	
その他	48	24	雇用延べ4人(2人)
計	1,299	1,450	

注)1 開発技術栽培では給液施設と根域制限シートの導入を、慣行栽培では灌水施設の導入を前提とする。

2 給液・灌水施設工事および根域制限シート等工事費は、施工業者の委託費とした。

3 備考の()内は慣行栽培のデータ

2. 経営収支

参考データ 表 25(45p)

1) 販売見込みと経営費 (10年生成園時)

表 4 成園時における所得の試算 (10a 当たり)

品種名	収穫量	秀品率	単価	販売額	経営費	所得	所得率
	(t)	(%)	(円/kg)	(千円)	(千円)	(千円)	(%)
幸水	4.0	78	330	792 (6a)			
あきづき	4.8	79	326	626 (4a)			
合計				1,418 (10a)	764	654	46

注)幸水、あきづきの品種構成比率は6:4。

①収穫個数は1本当たり120個程度。

②開発技術導入により、収量および品質向上効果が期待できる。

③経営費は変動費、固定費および購入用役費とした。

④このことから、粗収益の増加が期待でき、所得は654千円と試算され、所得率は46%と慣行に比べて8ポイント高まる。

2) 開園からの収支の推移

参考データ 表 26 (46p)

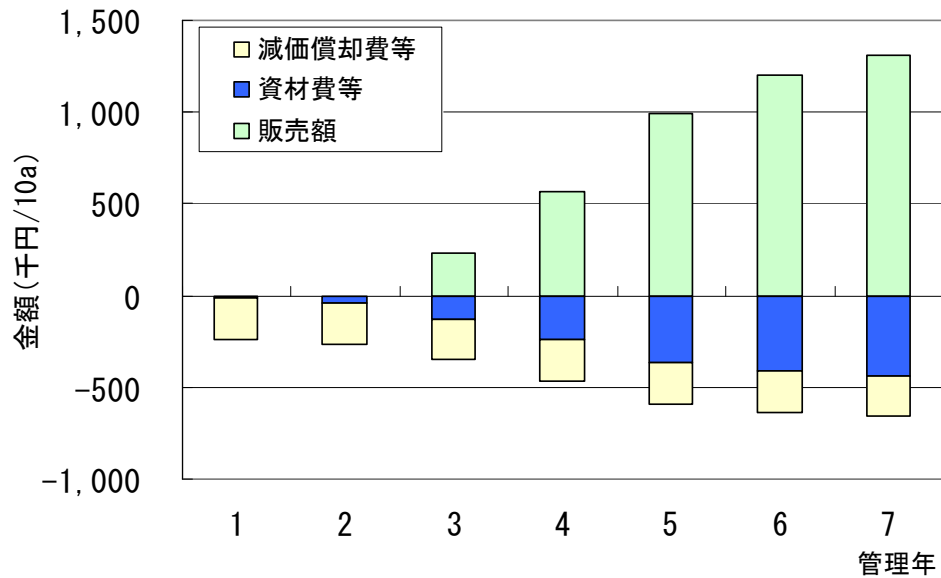


図 32 開園からの販売額と経費の推移

注：1年生苗木をほ場または育苗用ポットに植え付けた時を管理1年目とした

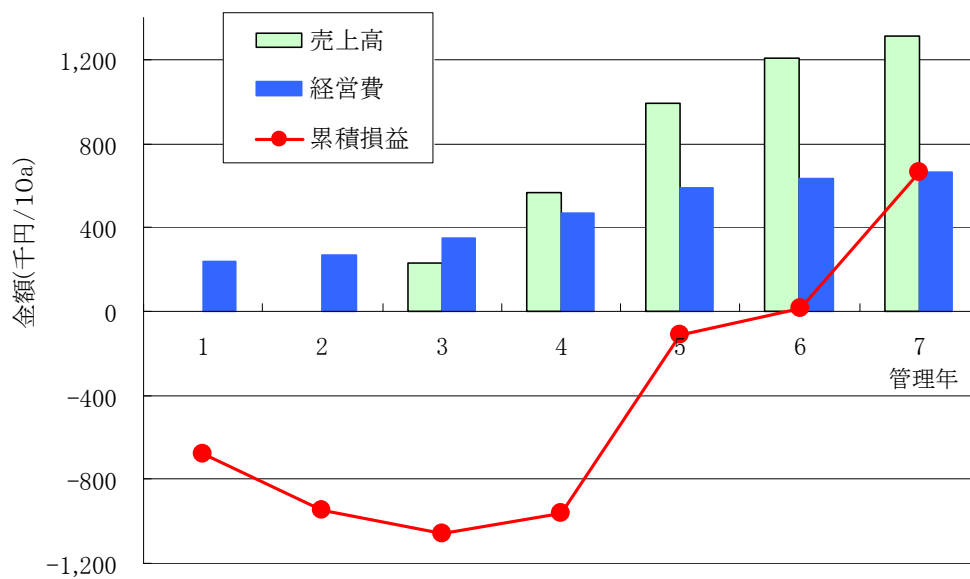


図 33 開園からの累積損益の推移

注：累積損益には開園費 441 千円を含む
育成価は 1,062 千円/10a

- ・ 育成期間における経営収支は、管理開始4年目(5年生樹)から単年度の売上高が経営費を上回り、累積損益がマイナスからプラスに転ずる期間が6年(慣行:9年)と短縮される

3) 作業内容と労働時間

参考データ 表 27 (46p)

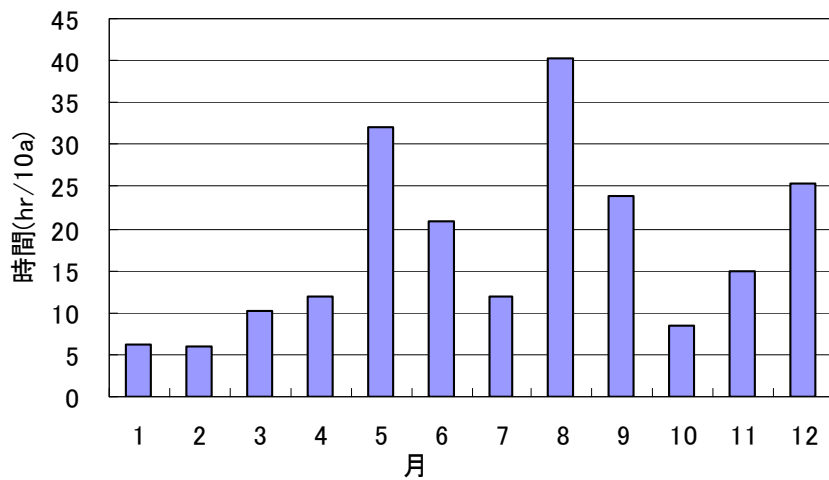


図 34 10a 当たりのナシ月別労働時間

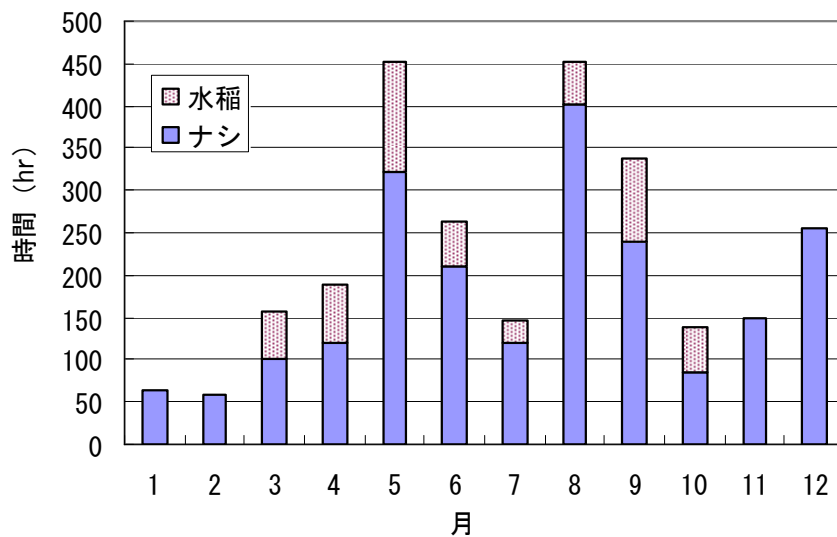


図 35 ナシ 1ha と水稲 3ha の複合経営における月別投下労働時間

- ① 開発技術の導入により主に剪定作業の軽減化（慣行栽培の 27%削減）が図られ、年間の労働時間は 10a 当たり 212 時間（慣行栽培の 10%削減）となる。
- ② 水稲とナシの作業競合時期は、5月における水稲の田植えとナシの摘果作業、8月における水稲の収穫とナシの収穫調整作業となる。
- ③ 特に5月においては、慣行栽培では 518 時間/ha を要するところ、開発技術では摘果作業 65 時間/ha の削減により 453 時間/ha となり、家族労働力 2 人で可能である。

4) 開発技術によるモデル類型の経営試算

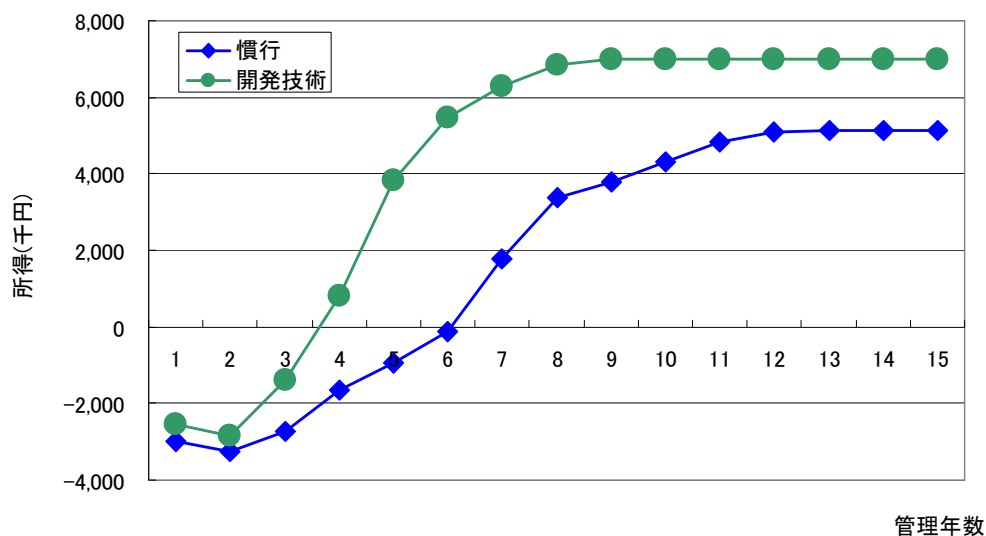


図 36 ナシ 1 ha と水稲 3 ha の複合経営における所得の推移

- ① この経営モデルにおいて、家族労働力（認定農業者）2人の目標所得 500 万円に達するのに、慣行栽培では 11 年を要するが、開発技術では 7 年と短い。
- ② 家族労働力 2 人で目標所得を確保するには、少なくともナシの作付面積 0.8ha を必要とする。また、雇用労働力 1 人が安定的に確保可能な場合は、ナシの作付面積を 1.5ha まで拡大でき、所得は 900 万円を超える。

参考データ 表 30 (47p)